

階

【きざはし】

～社会科教育を考える～

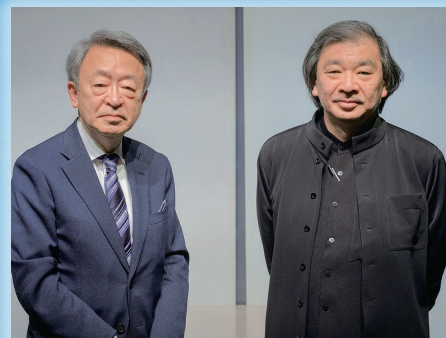
No. **46**

2021年12月

- 池上彰のインタビュー④⑥
社会のためにできることを問い続ける 2
坂 茂 建築家
- わたしの一里塚
自分の色で生きていく 8
西村 宏堂 僧侶・メイクアップアーティスト
- ここに教育あり
まちづくり活動としての絵マップコンクール
～19年間の実践～ 10
江端 益子 あこ絵マップコンクール実行委員会 事務局長・初代会長
- 社会と教育の架け橋
将来のリスクを学ぶ
～生命保険を通して知る社会のしくみとリスク管理～ 12
斉藤 数弘 公益財団法人 生命保険文化センター 生活情報室
- 異国日本の地に立って
モンゴル人としての私 14
ショロン 公益財団法人 守屋留学生交流協会 第40回奨学生
- 子どもと、ともに
茶園活動を通して自信と誇り・郷土愛を 裏表紙
岐阜県御嵩町立上之郷中学校
- 資料
伊能図をめぐる

子どもと、ともに (裏表紙掲載)

今回は岐阜県御嵩町立上之郷中学校の取り組み



池上彰のインタビュー
今回は 坂 茂 さん

生徒は手摘みで茶を摘む。
標高約320mの茶園は、
無農薬で受け継がれている。

帝国書院

池上彰の インタビュー vol.46



社会のために

できることを問い続ける

建築家・坂茂さんは、難民のシエルター、被災地の避難所や仮設住宅など、日常生活を送ることが困難な方たちが少しでも快適な環境で暮らせるように、という思いを形にしました。そのための資材の一つが紙でできた管「紙管^{しかん}」。建築物に紙を使う発想やアイデアはどこから生まれるのでしょうか。そして今、その先に、何を見ているのでしょうか。

このインタビューは、2021年3月8日、坂茂建築設計にて収録しました。

撮影 吉永考宏

建築家
ばん しげる
坂 茂

1957年、東京都生まれ。建築家。慶應義塾大学環境情報学部教授。84年、クーパー・ユニオン建築学部（ニューヨーク）卒業。85年に坂茂建築設計を設立。95年、国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）コンサルタント。同年、NGOボランティア・アーキテクト・ネットワーク（VAN）設立（2013年よりNPO）。国内外の災害支援活動に積極的に取り組む。2014年プリツカー建築賞、17年マザー・テレサ社会正義賞、紫綬褒章ほか多くの受賞歴がある。代表作は、富士山世界遺産センター（静岡県）、ポンピドー・センター・メス（フランス）、大分県立美術館など。

独自の素材や構造を開発したかった

池上 東日本大震災から10年が経った今年3月、取材のために宮城県女川町^{おんながわちょう}に行きましたら、「女川駅は坂茂さんが設計されたのですよ」と女川の方が誇らしげに説明してくださいました。

坂 女川町に仮設住宅をつくった後、そこに住む皆さんに「次は何が欲しいですか」とアンケートをとりましたら、一番多かったのが銭湯でした。「足を伸ばしてゆっくりお風呂に入りたい」ということで、町長のアイデアもあり、駅舎2階に温泉施設を設計しました。

池上 なるほど、そうだったのですか。駅にお風呂があつてとても驚きました。

坂 女川ではそのような経緯がありました。私は基本的に災害時の仮設住宅や避難所など住環境を改善する緊急支援をおもに行っていて、復興にはあまり関わっていません。復興は、地元の建築家が時間をかけてその土地に寄り添いながら進めていくべきだと考えています。唯一関わったのは、作家の柳美里^{やなぎみり}さんが福島県相馬市に開いたフルハウスというブックカフェです。柳さんが女川の銭湯にあった紙管の椅子が欲しいと連絡をくださったので、椅子は寄付をして、私が教えている慶應義塾大学の学生や大工さんと一緒に店舗の設計、施工までを行いました。

池上 私がいま座っているこの椅子も背もたれや座面が紙管でできていますね。坂さんは紙管を使ってさまざまな建築物を設計しています。紙を管にして中空にすると非常に強度が増すということは理論的には理解できますが、その発想にとっても驚きました。坂 大学卒業後すぐに設計事務所を始めたので、実



ジャーナリスト
いけがみ あきら
池上 彰 (聞き手)

1950年、長野県生まれ。ジャーナリスト。名城大学教授。慶應義塾大学卒業後、73年、NHK入局。報道記者として勤務。94年から11年間、「週刊こどもニュース」で子どもたちにわかりやすくニュースを解説。2005年、NHKを退局。『池上彰の君と考える戦争のない未来』（理論社）、『池上彰の社会科学教室』（帝国書院）など著書多数。最近では東日本大震災から10年経った女川町や石巻市、富岡町などを取材。本誌の対談を集録した『池上彰が聞いてみた「育てる人」からもらった6つのヒント』（帝国書院）も好評発売中。

エコロジーにつながった。そういう意味でもとても先進的ですね。

坂 すぐに紙管工場を訪ねたら、通常の建築資材より安価な上に、太さ、長さや厚みも自由にできることがわかりました。まずこの会場構成の内装として使ったことで十分に強度があるとわかり、これは構造にも使えそうだと思います。

実は、建物の耐久性、耐震性は材料の強度と関係がありません。強度が高いコンクリートでも地震で壊れますし、弱い木でもきちんと設計すれば壊れない。理論的には、紙を使っても耐久性、耐震性のあるものをつくれるだろうと考えました。有名な構造家松井源吾氏の協力をいただき、強度や耐久性の実験を試みると安全性に問題はなく、建設大臣(当時)認定もあり、実際に紙管を建築構造に使い始めました。

仮設かどうかを決めるのは材料ではない

池上 坂さんが災害支援を始めたきっかけは、どのようなことでしたか。

坂 94年、ルワンダの民族紛争での難民支援です。ツチ族とフツ族が争い、200万人の難民が周辺諸国に逃れました。難民キャンプの様子を報道で見ると、みんな毛布にくるまって震えていました。

池上 アフリカでもルワンダやその周辺は高地で、朝晩や雨季は気温が低くなります。

坂 その記事には、国連のシェルターでは暖を取れないとありました。風雨も防げず、寒さで肺炎も発生しているという。まずはシェルターを改善しないと医療活動も追いつかないと思い、アポイントなしでジュネーブの国連難民高等弁務官事務所(UNHCR)に行きました。運がいいことに、シェルター設営の担当

務経験がないのがよかったのでしょう。建築事務所に入って法規を読みながら経験を積んでいたから、できることを既成概念で制限してしまっていたかもしれない。私はそういう前提がなく、学生時代をアメリカで過ごしたこともあって、日本の建築の常識的なことをあまり知らなかったのです。

池上 経験や常識がないがゆえに、結果的に常識破りになったわけですね。

坂 そうですね。「環境によい建築」などと言われることもありますが、私の設計は「身の回りにあるものを使い、無駄を無くしたい」という発想が出发点です。建築にも流行がありますが、私は流行を追うのが嫌いです。独自の素材や構造、システムの開発をした建築家、バックミンスター・フラーやフラ

イ・オットーなどに憧れていましたので、私自身も独自のものを目指していました。

紙管を使い始めたのは設計事務所を立ち上げた翌年、1986年です。アルヴァ・アアルトというフィンランドの建築家の展覧会で会場構成を手がけたとき、アアルトのように木をふんだんに使いたいが、予算が少なかった。そのとき、ファクシミリ用紙の芯の紙管がもったいないので何かに使えないかと事務所にとってあったのを見て、「あ、これだ!」と思いました。

池上 あの頃のファクシミリは巻き紙でしたね。芯も、かなり丈夫なものでした。その頃はまだエコロジーなどという発想は世の中にありませんでしたが、坂さんの「もったいない」という発想が、結果的に

コンクリートでも金儲けの建物なら仮設。 紙の建築でも愛されればパーマネントに。

である建築家にお会いして話すことができたのです。

その頃、実はUNHCRも困っていました。当初、難民たちは支給されたプラスチックシートと周辺から切ってきた木でシェルターをつくっていましたが、多くの難民が木を切り続け環境破壊にも繋がりました。そこでアルミのパイプを支給すると、難民たちはお金を得るためにそれを売って、また木を切ってしまうのです。私が再生紙の紙管の構造を提案したところ採用されることになり、そのままUNHCRのコンサルタントになりました。

池上　そして、95年に阪神・淡路大震災。

坂　はい。私はルワンダの難民支援に関わってから、難民問題に関心を持つてきました。阪神・淡路大震災のとき、日本政府が初めて受け入れたボートピープルといわれたベトナム難民の方が神戸に多く暮らしていることを新聞で知りました。神戸市長田区のカトリック鷹取教会に難民の方たちが集まっていると知ってそこに向かうと、建物は被災して全焼していました。しかし、そこは復興拠点にもなっていて、教会の跡地で焚き火を囲んでいろいろな国の人が集まってミサをしていました。教会のためにボランティアをしたいと思います、「紙で教会を建て直しましょう」と神父さんにお伝えしたら、最初は信用していただけませんでした。

池上　そうですね。まさか紙で建築物ができるとは思いませんでしょう。

坂　私は諦めが悪いものですから、毎週日曜日の朝のミサに、東京から始発の新幹線で神戸に通い続けました。そして、親しくなったベトナムの難民の方たちがテントで生活を続けていることを知り、ビールケースの基礎と紙管で仮設住宅をつくることになったのです。これがうまくいき、神父さんの理解も得られ、教会をコミュニティ・ホールとして立て直すことになりました。

池上　「紙の教会」として、シンボルになりましたね。

坂　多くのボランティアの方々とともに、紙管でつくった「紙の教会」は神戸で10年使われ、その後、台湾の地震の被災地に移築され、今も教会兼コミュニティ・センターとして使われています。

池上　コンクリートの建物は半永久的で、そうでないものはすぐ壊してしまうものと思いますが、そうではないのですね。

坂　コンクリートでも、デイベロップパーが金儲けのためにつくった建築は、また別のデイベロップパーが壊して新しいものをつくりますから、ある意味、仮設だと言えます。この教会のように、紙でできた建築でも、みなさんに愛してもらえればパーマネントになりうるのです。私は、仮設かどうかは材料の違いではないと考えています。

「この活動を一生やれ」と背中を押された

池上　ルワンダの難民シェルター設計も阪神・淡路

大震災の仮設住宅や教会再建も、坂さんのように行動に移すには強い意志が必要だと思います。そこにどのような思いがあったのでしょうか。

坂　私が事務所を開いて10年経ったころ、建築家はまったく社会の役に立っていないじゃないか、と思いきり知らされていました。医師や弁護士はいつもつらさを抱えた人たちを助けているけれど、建築家は人のお金で自分のつくりたい建築をつくられているだけだ。建築家は、歴史的に見ても特権階級のための仕事をしています。財力や権力を社会に示すために建築家は使われる。その仕事を否定するわけではありませんが、災害で家を失った人が避難所や仮設の住環境で苦しんでいるのなら、それを改善するのは私たちの責任ではないかと考えています。地震で人が死ぬのではない。建物の倒壊で人が死ぬ。それは建築家の責任でもあります。復興の前に、われわれ建築家が何とかしなくてはいけない、という思いから、被災地に飛び込んでいきました。

池上　その後、新潟県中越地震や東日本大震災など、被災地での支援を続けられましたね。

坂　実は、この神戸の「紙の建築」で毎日デザイン賞をいただきました。その賞は建築の賞ではないのですが、私がとても尊敬している三宅一生さん、田中一光さん、倉俣史朗さんなどが若い頃に受賞しているの、それがとてもうれしくて、「この活動を一生やっていけ」と背中を押されているような気持ちで続けてきました。

神戸では、ボランティアは人のため、感謝されるためにするものではなく、自分のためであることに思い至りました。ですので、「やってあげている」という気持ちではいけないと考えています。

池上 なるほど。日本ではボランティアをやっているものとして捉えることのほうが多いかもしれませんね。海外ではどうですか。

坂 確かにそうした誠意のボランティアも必要ですが、それだけでは続かないと思います。海外ではそれなりの報酬があったり、訓練のシステムができていたりというところも多いです。有事にはボランティアに行くために有給休暇を取ることができ、避難所には、運営担当、料理人、衛生士、医師などがパッケージになって動く国もあります。日本にはこういった仕組みがまだなく、災害時には被災者でもある役所の方が避難所を運営・運営しなければならぬ。

池上 それに、日本の避難所では、いまだに仕切りのない体育館で雑魚寝のことが多いですね。プライバシーな空間がほとんどありません。ひとりの人間として大切にされていないと思うこともあります。坂 プライバシーの保護は、人権を守る上で避難所



豪雨に見舞われ、「避難所用・紙の間仕切りシステム」が設置された熊本県人吉市（2020年）。紙管で柱と梁を組み立て、目隠し用の布（カーテンのように開閉可能）をかければ、体育館のような避難所でもプライバシーが確保できる。東日本大震災の被災地でも設置され、新潟県中越地震の間仕切りシステムから4バージョンめになる。2016年のイタリアの地震災害時には、海外で初めて設置された。 photo by Voluntary Architects' Network

ボランティアは人のためではなく、自分のためにすること。

ではとても重要です。神戸の避難所を見たときに、次にどこかで大きな地震が起きたらまた大変なことになると思ってきました。2004年に新潟県中越地震が起きたときはすぐに学生と現地に入り、避難所でのプライバシー保護のための「避難所用間仕切りシステム」を紙の家の形で初めてつくり、授乳室や更衣室などとして使われました。その後、災害のたびに改良を重ね、紙管のフレームに布のカーテンをかけ、大きさも自由に調整できて、かつ備蓄も可能な現在の「避難所用・紙の間仕切りシステム」をつくりあげました。そして、東日本大震災のとき、東北の被災地80か所にこの「紙の間仕切りシステム」を持って行きましたが、最初の30か所からは「前例がない」と受け入れられませんでした。それでも少しずつ受け入れられていき、50か所で設置させてもらうことができました。

東日本大震災以降、私が代表を務めるボランティア団体のNPO法人ボランティア・アーキテクト・ネットワーク（VAN）では、前もって自治体と防災協定を結び、災害時にはこのシステムを届けることができる体制を全国に広めています。20年の熊本豪雨で内閣府からも認められ、政府での備蓄も始まっています。現在、東京都や福岡県など多くの自治体と供給協定を結んでいます。16年かかりましたが、これでプライバシーの保護の標準化ができたのではないでしょう。

池上 今では仕切りがあることで新型コロナウイルスの飛沫感染防止にもつながると、ワクチン接種会場にも使われていますね。様々な意味で先駆的ですね。

夏休みの宿題から建築家へ

池上 坂さんは、中学校の技術・家庭科の宿題から建築家への道が始まっていますね。

坂 最初は家の増改築で大工さんを見て、「すごいなあ」と思ったことがきっかけです。小さい頃は建築家という職業も知らなかったし、木が好きでしたから、大工になりたいと思っていました。中学の技術・家庭科の夏休みの宿題で、自分で家を設計して模型をつくる課題があり、私の作品が秋には優秀作として学校に展示されました。設計の課題はとても楽しくて、建築家になるしかないと思いました。

一方で、ラグビーにも真剣に取り組んでいました。高校のときには東京都大会で優勝し、全国大会に出場しました。それなのに1回戦で負けてしまった。大学で建築を学びながらラグビーも続ける予定でしたが、これはどうも全国レベルではないぞと思い知らされた。そこで、建築に集中しよう、東京藝術大学を目指そうと切り替えて美術予備校に通い始めたんです。ニューヨークのクーパー・ユニオン大学の学部長、ジョン・ヘイダックさんの建築に出合ったのはその予備校時代です。雑誌の特集を見て感動し、「この大学に行きたい」と思い定めて、アメリカに

留学することを決めました。

池上 その行動力がすごいですね。ルワンダにしても、神戸にしても、思い立ったらすぐに行動に移す。高校生の頃からそうだったのですね。

坂さんはアメリカの大学で学び、今は日本の大学で教えていらっしやいます。教育のあり方はずいぶん違うのではないですか。

坂 私が日本の大学で教え始めていちばん驚いたのは、学生が授業をサボることです。愕然としました。アルバイトをしている学生も多い。アメリカでは親の支援を受けられず生活費や学費のためにアルバイトをしている人はいますが、それ以外の人は長期休み以外はアルバイトをしていません。授業についていけなくなりますから、アルバイトをすることも、授業をサボることも、あり得なかった。

池上 アメリカの場合は子どもが経済的に独立していますね。大学に行きたければ自分で奨学金を取るか、学費ローンを借りて自分で払いますから、自分がお金を返さなければならぬ。そうすると大学で必死になって学びます。

坂 私が教えている学生には、「建築家になるのはプロ野球選手や音楽家になるのと同じ」と伝えます。スポーツ選手や音楽家を目指す人は練習をサボるなんてあり得ませんよね。

もう一つ、気になることとしては、例えば学生に「この曲線はどうやって決めたの?」と聞いてもきちんと答えられないことです。「かっこいいから」と答えます。かっこいいというのは主観ですから、万人を説得する材料になりません。ほかの先生からも「どうして感性で設計をしてはいけないのか」と聞かれますが、私は感性はもともと誰もが持ってい

大学では、論理を構築する力、人を説得する力を鍛えることが重要。

るのだから、大学時代に鍛えなければいけないものではないと思います。学生時代に鍛えなければならぬのは論理構成であり人を説得する力です。人にプレゼンテーションするときには論理立てて伝えなければ、相手には伝わらない。これは私がアメリカの大学で学んだことでもあり、自分で論理を構築できるようなことが大学の教育としてまず重要なことだと考えています。日本は感性で「これがいい」と言えばそれで通ってしまうところがありますよね。

池上 なるほど。そこですね、大学で学ぶべきことは。私は高校生の頃、美術の成績はあまりよくあ

りませんでした。自分が描いた絵についてみんなにプレゼンテーションをしたら、突然一番いい点を取ったことを思い出しました。

坂 芸術にはそういう側面もあると思います。現代アートなどはとくにそうですね。

一方で、日本の大学にも良いところはあります。例えば、ゼミや研究室の制度です。学年を越えて所属し、同じテーマに取り組む。これはアメリカにはない制度です。私の災害支援のボランティア活動は学生たちと一緒にしています。研究室だと何年も同じ学生たちと勉強をし、鍛え合い、被災地で実践を積みことができます。アメリカは1セメスター(学期)ごとに学生が変わるのでそういうことはできませんが、日本では中長期的な活動ができる。この制度は素晴らしいと思います。

学生に伝えてほしいのは学問の楽しさ

池上 日本の小・中学校や高校での教育について何か考えなどありますか。

坂 やはり、学問の楽しさを学生に伝えていただきたいですね。私はアメリカに行くまで英語も苦手で、歴史にもまったく興味がありませんでした。ところが、留学してから日本語の活字に飢えて、司馬遼太郎を読み始めた止まらなくなりました。歴史はこんなに楽しいものなのだと、そこで初めて気がつきました。やはり、どの教科も暗記するだけの授業は



ポンピドー・センター・メスは、パリのポンピドー・センターの分館として、2010年、フランス北東部のメス市に建設された。ゆるやかな曲線をもつ屋根の構造は、竹で編んだ中国の伝統的な帽子から着想したという。©Didier Boy de la Tour

歴史を知ること、 新しいものを生み出すために大切なこと。

つまらないですね。英語も実際に会話をしたらこんなに楽しいのに、その楽しさを学ぶ機会がない。知識の詰め込みだけを求めるのではなく、学問そのものがいかに楽しいかを教えるべきだと思います。

池上 私は東京工業大学で教えていますが、学生の多くは社会科学が苦手です。中でも、歴史はとにかく暗記するものだと思います。多くの学生が多いですね。私が現代史を教えるときに、ここにはストーリーがあつて因果関係がある。それで結果的にこういうことが起きたんだと、歴史を因果で説明すると「そんなに面白いのか。それなら理解できる」と彼らの意識も変わります。東工大生は特に、「因果関係は」「論理的にいうと」という話をする、飛びついてくれます。そういうことが中学や高校の歴史の授業にもあるといいですね。

坂 建築の歴史もまさにそうです。私もカリフォルニアで最初に大学に入った当初は建築の歴史にあまり興味がありませんでしたが、ニューヨークの大学に移り歴史的建造物の分析をさせられる中で、建築の歴史の重要性によりよく気づくことができました。たとえば上野の国立西洋美術館を設計したル・コルビュジエも、同時代のミース・ファン・デル・ローエにしても、歴史を知り、過去の建造物を下敷にして新しい自分の考え方を表現しています。たとえば、ル・コルビュジエならルネサンス後期のアンドレ・パラディオの建築が下敷きになっています。

天才と呼ばれる偉大な建築家も、歴史を学んでいる。そしてその歴史が斬新な建築の下敷きになっている。歴史を勉強するということは、新しいものを考えるためにもとても重要なことなのです。

これからの世界を生きていくために

池上 いまこそ、日本も世界も大きく変わらなければなりませんね。東日本大震災が起こった10年前、日本はグレート・リセット（社会を刷新すること）されたいと思いましたが、そうはなりませんでした。

坂 新型コロナウイルスは大きな問題ですが、いろいろなグレート・リセットが起こりつつあると考えています。ネガティブなことをポジティブにとらえて、グレート・リセットを起こさないと、日本も良くなっていけないと思います。

池上 建築物に関しても、これまでは気密性や断熱を目指しましたが、感染症対策として換気性が重要になりました。そもそも日本の建築は昔から風が通り抜けるつくりでした。

坂 日本はもともとエコロジーな生活をしている国です。寝るときに自動でオフになる空調は日本特有の機能です。そういうエコロジカルな考え方や生活ができる素地があるのですから、それをうまく伸ばしていく必要があると思います。技術の開発や材料の開発だけではなく、それぞれの生活のリズムやシステムを変えることは、これからの大きな課題です。



対談を振り返って

池上 日本も今後、大きく変わらなければなりません。カーボン・ニュートラル（温室効果ガス排出量実質ゼロ）を目指すことも必要ですね。

坂 環境問題への対策を数字の面からだけでなく、これからは、文化や美しさもしっかりと守りながら進めていかなければ、本当の意味での環境改善にはなりません。このような視点からEU欧州委員会委員長が中心となって「ニュー・ヨーロッパ・バウハウス」という多様な専門家からなるプロジェクトがつくられました。今年、世界中から選ばれた18人の委員の一人として、私も選出されました。世界は進んでいます。この感染症が終息したら、若い人たちにはどんどん日本を出て、広い世界を見てきてほしいと思っています。

対談編集／太田美由紀、天然社

「建築家はまったく社会の役に立っていない」という自覚が、難民という社会的弱者、被災者という災害弱者のために役に立ちたいという思いになり、画期的な建築をつくり出す原動力になりました。大学で鍛えるべきは論理構成であり、人を説得する力。これは大学に限らず、学校教育で求められることでしよう。

坂さんの行動力には圧倒されますが、社会のために役に立つ自分の役割を見出したとき、働きがい、生きがいを見つけることができるということを私たちに教えてくださいます。

自分の色で生きていく

僧侶・メイクアップアーティスト
にしむら こうどう
西村 宏堂

1989年東京生まれ。高校卒業後、アメリカに留学。2013年にパーソンズ美術大学を卒業。その後、アメリカ・ニューヨークを拠点にメイクアップアーティストとして活動しながら、15年浄土宗僧侶となる。「性別も人種も関係なく皆平等」のメッセージを発信し、LGBTQ+の当事者として国内外で講演などの啓発活動が続けている。20年、『正々堂々 私が好きで生きていいんだ』を上梓。



Photo by Yoko Miyazaki

いろいろなアイデンティティと仕事

私はアメリカや日本でメイクの仕事をしてますが、僧侶でもあります。同性愛者、LGBTQ+の当事者として本を書いたり、講演をしたりといった活動もしています。僧侶というとお寺をイメージする方が多いと思いますが、私の仕事はお寺の中だけとは考えていません。

例えば、日本人で既婚の女性教師がいたとして、ある時は日本人、またある時はお母さん、妻、先生と、いろいろなアイデンティティをもっているのが人間です。同じように私も、西村宏堂という一人の人間が僧侶の資格をもち、ミス・ユニバースの世界大会でメイクアップを行う仕事もすれば、国連や大学で女性と子どもの健康、LGBTQ+や宗教について講演もする。さま

ざまな悩みを抱える方々にアドバイスしたり相談に乗ったりしていますが、これも僧侶の本来の仕事であると思っています。また、その人に合った化粧をするメイクアップアーティストの仕事とも、どこかで通じていると感じています。

蜘蛛の巣から解き放たれる

私は幼いころから、お姫様ごっこやお絵描きが大好きな子どもでした。小学生くらいまでは男女問わず一緒に遊んでいましたが、次第に周囲との違和感に悩むようになりました。高校では学校になじめず、インターネットで海外の同じ境遇の仲間たちと語り合いました。唯一自分のことを話せる彼らとの会話のために、英語はよく勉強しました。そして、小学生のころから習っていた華道の先生に、「宏堂くんは将来、偉大な芸術家になる」と言ってもらえたことがうれしくて、いつしかアメリカで美術を学ぶのが目標になりました。

自分がどのような人間で、何を考えているかを自覚しながらも、それをいつも隠しているのはとても生きづらいものでした。ずっと頭の上に蜘蛛の巣があって、少しでも伸びをしたら引つかかってしまうような感じです。少しでも自分のセクシュアリティについて話してしまつたら周囲にどう思われるのか。特に、両親に知られたら見捨てられるのではないかと、とても怖かったのです。

LGBTQ+に対し、露骨な差別はなくても話題として避ける人が多い日本社会がよいとは思いませんが、留学したアメリカをはじめ海外

では、ときに暴力に発展するような激しい差別が根深くあります。一方でそれぞれの性自認を尊重し合えるLGBTQ+の人たちや、理解を示す異性愛者の人たちが多いのも確かです。そしてLGBTQ+の人たちも社会のなかで仕事や役割をもち、堂々と発言をしている。私が学んだ美術大学の学部長もそのひとりでした。同性のパートナーがいることを公にし、悩みや差別も乗り越えてきた方で、学生からも尊敬されていました。

そういう素晴らしい人々からの影響を受け、私も自分のことを恥ずかしく思うことなく、自由に自分らしくありたいと思い、勇気をふりしぼって両親に本来の自分を打ち明けました。24歳の時です。私のことをまっすぐに受け止めてくれた両親が本当に自分の味方であることをはじめで知ったような感覚があり、恐れることは何もないと思えました。そして、自分を隠したり逃げたりせず、社会のなかでの役割を果たす覚悟もできました。僧侶となり、私なりのアプローチで多くの方のために役に立ちたいと思います。活動を続けています。

メイクと仏教の力

お洒落が好きでメイクへの憧れはありましたが、男性の体に生まれた自分がやってはいけないことと感じていました。はじめて化粧をしたのは、やはりアメリカへ行ってからです。ある時、悩んでいた友人を勇気づけるためにメイクをしてあげたことがあり、その経験が印象的でした。メイクで彼女の表情が明るく自信をもつ



メイクは人を内側から明るくしてくれるもの。外見も大切な「自分らしさ」のひとつである。講座などでの指導も多いが、自身もメイクをし、好きなファッションに身を包む。2021年10月には、アメリカ『TIME』誌の次世代リーダーのひとりに選ばれた。

たものに変わり、それがメイクを落とした素顔のときにも続くことに気づいたのです。

メイクの仕事をしていきたいと思い、美術大学2年のとき、アメリカで活躍するメイクアップアーティストのアシスタントになりました。翌年からミス・ユニバースの世界大会のメイクに参加する機会にも恵まれました。プロとして活動している今も、メイクアップアーティストという職業は、その人のよいところを引き出す仕事だと思っています。

僧侶は逆に、私が子どものころ嫌だったものでした。両親はお坊さんになれと言ったことはありませんでしたが、お寺の子として生まれ、父は住職ですから、周りから跡継ぎと見られていました。両親にカミングアウトした後、自分が目を背けてきたものと向き合ってみようと考え、僧侶の修行に臨みました。修行は大変でしたが、大切なことを多く学びました。仏教では本来、性別や人種、あるいはLGBTQ+であるかなどとは関係なく、みんなが平等に救われると教えています。男女差別的だったり、LGBTQ+を否定しているような部分がありますが、それは後世の解釈によるものと考えられています。

自分の体験もまじえ、こうした仏教の教えを話すと、「肩の荷が降りた」と言う方、抱えている悩みや苦しみを私に小さく「カミングアウト」

をする方もいます。仏教を知って、知識や考え方をより広げてもらえたらと思っています。

一人ひとりがもつちがう色の輝き

差別というのは、「いいこと」の裏返しであると思います。「私たち日本人だよね」「私たち同じ学校、同じクラスだね」といったことからはいよい団結が生まれ、そこには連帯感や安心感があります。けれどそこから疎外された者は、やはり嫌な気持ちになるでしょう。

疎外されないように無意識に周りに合わせていても、「私は本当はこうだったんだー」と気づくことがあります。この声を聞いて動いていくことが、正直に自分らしく生きることだと私は思います。自分らしくいられれば、同じようにその人らしく生きている人を認めることにつながります。そして他人の自由を願うことは、自分が自由になるきっかけになるのです。

仏教の教えでこのような一節があります。

『青色青光 黄色黄光 赤色赤光 白色白光』

（『阿弥陀經』より）。これは「青い蓮の花は青く輝き、黄色い蓮の花は黄色く輝き、赤い蓮の花は赤く輝き、白い蓮の花は白く輝く。」という意味です。すなわち、私たち一人ひとりがすでにそれぞれの色を持ち、それぞれが光り輝いているという意味です。

世界にはまだ多くの国でLGBTQ+であることが処罰されるような法律が存在するそうです。そのような法律を見直してもらいために、多様な宗教の成り立ちや世界の現状を学び、対話をしていきたいと思っています。

理解されなくても自分を否定しない

最近、「多様性の尊重」という言葉もよく聞かれます。それには人種や性、障がいの有無などの属性で差別されず、自分も他人もそれぞれ人間として価値は同じで、どのような人でも平等に扱われる権利があるんだと、意識をしていくことが基本だと考えています。マイノリティは弱いのではなく、平等であると価値観をアップデートすることも大事です。

子どものころの私は、学校で着替えをするときに男子と女子に分けられるのが苦痛でした。今なら、どちらにも分けられたくない子たちは多目的室や保健室で着替えるという対応もできるかもしれませんが。これまで通りだからよいというのではなく、学校は「私たちは自由です」「私たちは選択できます」「私たちは個を尊重する仲間同士です」ということを大切にする場所であってほしい。そして単に差別が悪いというだけではなく、なぜいけないのか、その理由や背景の説明は、子どもたちには必要だと考えています。

子どものころ、「自分らしくしたいんだよ」と言ってくれる大人がいてくれたらよかったのと思うことがあります。今の子どもたちには、周囲の人から間違っていると言われたとしても、自分を否定しないで言ってもらいたい。周囲の人たちが正しいとは限りません。あなたの手のひらのなかにある小さな火を、「自分らしさ」を消さないでほしい。それが誰かのための大切な光になるかもしれません。



公開審査会では、自分の作品の前で1分間のプレゼンテーション。緊張するけど、みんながんばれ！（2点とも2019年撮影）

ここに教育あり

まちづくり活動としての 絵マップコンクール ～ 19年間の実践～

あこう絵マップコンクール実行委員会
え ば し ま す こ
事務局長・初代会長 **江端 益子**



絵マップコンクールとは

わがまち赤穂市は、兵庫県の西の端にあり、人口約4万6千人、忠臣蔵のふるさとです。

2003年、私は市内にある関西福祉大学附属地域センター主催の女性リーダーシップセミナーで学び、1998年に東京の世田谷区で始まった絵地図のコンクールの企画に出会いました。赤穂の子どもたちの郷土愛を育て、その作品を見た大人たちにも、赤穂を再発見してほしいという想いで、第1回あこう絵マップコンクールを開催しました。

第2回からは、市民有志による実行委員会を結成しました。委員は、市内の主婦・会社員・店主・大学生など10代から80代まで約20人です。活動費は、初期は公的な支援を受け、その後は毎年市内の企業や各種団体からの協賛、募金などで賄ってきました。また、関西福祉大学には、審査会の会場提供や学生ボランティア参加など、全面的な協力をいただいています。こうした、市民・企業・大学等の協力を得て、今年で19回目を迎えることができました。これまでに1275作品が集まり、応募者

●あこう絵マップコンクール概要

目的 自分が住んでいるまちについて調べたり発見したりしたこと、好きな場所や秘密の場所など、赤穂を題材にして宝物を探す絵地図（絵マップ）づくりを通して地元の魅力を再発見し、郷土愛を育成し、まちづくりの意識を醸成する

表現方法 模造紙や厚紙に彩色したり、色紙や写真や布地をはりつけるなどの工夫をすること

作品の規格 縦80～146cm×横80～146cm、高さ15cmまで

応募資格 小学生以下の児童、幼児の個人またはグループ（親が子どものアイデアをもとに手伝うことや、クラスでの共同制作も可能）

審査基準 まちに対する子どもらしい視点や発想のおもしろさ、作品づくりについての創意工夫や熱意などを総合的に判断

総数は2380人となっています。児童の作品の一部を紹介しましょう。幼稚園・小学校低学年では、自宅周辺の地図を描き、ペットの亀が散歩したときの歩数を記録した作品、中学年では、地元の全自動販売機の場所や、マンホールを全部調査しカメラに収めた作品がありました。高学年になると、旧赤穂上水道で隧道（トンネル）の長さを測るために小舟を流し、速さと時間で計算して割り出すと

いう工夫をした作品や、市内の観光名所を巡りカルタで表現した作品（後に観光協会で実用化され、赤穂義士祭で屋外のカルタ大会実施）などがありました。幼稚園や低学年だった子どもたちは学年が上がるにしたがって作品のレベルが上がっていきます。当コンクールのホームページでは、第1回からの全作品を載せています。

子どもも大人も楽しむ審査会

当コンクールの特徴は公開審査会です。開会に先立ち、地元の社会人バンドが絵マップテーマソングを歌い、手づくりキャラクター「マップコン」（着ぐるみ）と一緒に参加者全員でダンスを踊ると会場の緊張感がやわらぎます。審査会では、応募児童が、審査委員、保護者、市民の前で自分の作品について1分間のプレゼンテーションを行います。時間が過ぎると、途中でも容赦なくベルが鳴ります。幼稚園児も同じです。その後、審査委員との質疑応答があります。絵マップをつくるために、どれだけまちを歩き、自分で考えたかを聞かれます。図書館やインターネットだけの調査では、簡単に上位入賞はできません。質

先人の貴重な文化遺産★旧赤穂上水道



2020年の最優秀賞は畑中彩希さん（当時小学6年生）の作品。全国展で文部科学大臣賞を受賞した、大人も見入る出来栄だ。ある応募児童の保護者は、「子どもと一緒に絵マップづくりをしたことは、これからも楽しい思い出として残り続ける」と話していたという。



一緒に調べていても、主体的に制作した子どもは、はきはきと答えます。保護者主導でつくった子どもでは、答えられません。当コンクールでは、絵地図としての作品の評価はもちろん、児童のプレゼンテーション力も重視しています。地図づくりの腕も上げるとともに、発表も上手になり、原稿なしで堂々と発表する児童もいます。

疑応答で「誰と一緒に行きましたか？」「あなたの好きなところはどこですか？」「つくる時に何が一番大変でしたか？」など次々に審査委員から質問が飛んできます。家族と一

作品発表の後は、審査委員による投票、討議が参加者の目の前で繰り広げられます。子どもも親も、審査委員もワクワクドキドキの中で、入賞作品が選ばれます。

審査委員は、国土地理院近畿地方測量部、大学の先生、教育関係者、各種まちづくり活動に関わる市民などです。いろんな視点で作品を評価していただきたいので、審査委員は1〜2年交代制にしています。また、関西福祉大学生賞も設けています。学生の視点で作品を評価してほしいからです。

また、当コンクールでは、第5回から5年連続応募賞を設けました。今年19回目ですが、これまで41人が受賞。中には、幼稚園から小学6年生まで応募した8年連続応募賞の強者も出ています。

児童は、生で作品を見て、発表を聞き、審査の行方を見守ります。審査会が終わるとすぐ、翌年の作品の構想に取りかかる児童もいます。このように、公開審査会は、子どもから大人まで楽しめるイベントです。残念ながら、コロナ禍で昨年と今年は公開審査会を行うことはできませんでしたが、翌年の作品づくりに活かしてもらえように審査会の様子をYouTubeで

配信をしました。

もうひとつのこだわりは、作品展示会です。作品が展示できる場所があれば、どこにでも出かけて行きます。市立図書館、市民病院をはじめ、赤穂義士祭、市の音楽祭など、イベント会場でも展示を行っています。子どもたちの絵マップは誰にでもわかりやすく、市民が知っている場所も多いので、たくさんの方が立ち止まって熱心に見てくれます。

赤穂から全国へ

当コンクールは、市民による地道な活動ですが、07年度国土交通省「手づくり郷土賞」地域活動部門に選定されました。これがきっかけで、09年度から全国児童生徒地図作品展連絡協議会に加えていただき、上位入選作品が全国児童生徒地図優秀作品展（事務局・国土交通省国土地理院）に出展ができるようになりました。全国展では、10、12、13年度に審査員特別賞を、そして、20年度には念願の文部科学大臣賞を受賞しました。また、10年には、国土地理院より、測量の日

に功労者感謝状もいただきました。絵マップにより、地方のまち・赤穂市を全国へ発信できました。

最後に、当コンクールで5年連続応募賞を受賞した卒業生のコメントを紹介します。

「6年間コンクールに参加させていただき、大勢の前で話すこと、人に伝えることを緊張せずにうまくできるようになりました。絵マップづくりを通して、まちづくりに興味をもちました。」（大学生18歳）、「初めて賞をもらったのがうれしくて、いつのまにか夏休みは絵マップづくりが楽しくなりました。」（中学生12歳）。この他にも、卒業生がそのまま実行委員になったり大学でまちづくりを学んだり、市役所職員になった人もいます。

私たちは、当コンクールを通して年々成長する子どもたち、題材が尽きることはない赤穂のまちをテーマにした地図作品とその表現力に、たくさんさんの感動をもらいました。そして、子どもを見守る大人たちの姿にも胸を打たれました。当コンクールの目的はまちづくりと人づくり。卒業生がこれから生きていく中で、絵マップによって自分が住むまちを好きになり、大切に思う気持ちが行動となつてつながっていくと願っています。

生命保険文化センターは1976年に設立され、学校教育活動を含む「消費者啓発・情報提供活動」、生命保険に関する各種研究会の運営・研究助成等の「学術振興事業」、生活保障に対する意識や生命保険の加入状況等の「調査研究活動」の3つの活動を柱とし、公正・中立な立場より教育・啓発・広報といった活動を行っています。「消費者啓発・情報提供活動」の対象は、中学生から大学生といった学生・生徒や若年層から高齢者層といった社会人、ならびに指導的な立場である教員や、消費者からの相談対応を行っている消費生活相談員となります。

▼学生・生徒向け講師派遣の実施

中・高校生を取り巻く社会環境の変化を受けて、来年の4月には成年年齢が引き下げられ、また今年度の中学校に続き、来年度からは高校において新学習指導要領が実施されます。中学校の社会科、高校の公民科・家庭科の新学習指導要領の解説には、「民間の保険」や「自助・共助・公助」に関する記述が新たに追加され、われわれの活動がより一層求められる場面が多くなると考えています。

社会と教育の 架け橋

将来のリスクを学ぶ ～生命保険を通して知る 社会のしくみとリスク管理～

生活保障と教育

公益財団法人 生命保険文化センター
生活情報室

さいとう かずひろ
齊藤 数弘



生命保険文化センターにおいて、生命保険制度の知識・理解の普及・促進を担う「生活情報室」に2010年より従事。現在、調査役として本部署の統括業務を担当。その他、学校教育用副教材の作成、講師業務などにも携わっている。

設立当初より、学校教育活動の柱として、授業時間の一部を利用し、当センター職員が講師となり無料で「生命保険実学講座」（以下、実学講座）を実施しています。講義では、生活設計やリスク管理、年金・医療・介護などの社会保険や生命保険についてお話ししています。昨年度より新型コロナウイルス感染症拡大防止を踏まえ、学校からの要望により、双方向によるオンライン講座や講義を収録した動画を提供するオンデマンド講座を実施し、状況にあわせて対面・非対面の選択が可能となりました。

実学講座は、20年度は中学校から大学までの全国約150校に対し、約370回の講座を実施しましたが、講座回数はコロナ禍前の19年度の約6割となりました。なお、実施した講座回数のうち約4割が非対面による講座となり、感染対策を行う学校側の要望に応えることができました。今年度も新型コロナウイルスの影響はあるものの、講座の実施方法の選択肢が増えたことで、コロナ禍前の実績に戻りつつあります。

▼リスクを学ぶ

実学講座は、中学・高校では主

に家庭科、社会科・公民科、総合学習の時間に行っています。

家庭科では、「生活設計とお金」をキーワードに、起きるかもしれないリスクに備えることの大切さを理解してもらいます。リスク管理の手段として土台となる公的な保障として社会保険、自分の生活環境にあわせて社会保険で足りない場合は自分で備える一つの手段としての「生命保険」があり、それが生活において果たす役割や特徴を伝えています。

社会科・公民科では、「少子高齢社会」をキーワードに、今後の日本の社会において社会保障費の増加の可能性等によりどのような問題が起こりうるか考え、社会保障制度ならびに預貯金や民間の保険といった「自助・共助・公助」について内容を理解し、適切な組み合わせについて生徒に考察してもらいます。家庭科と同様、自助の一手段として「生命保険」についても説明します。

総合学習の時間では、キャリア教育にも関連させた外部講師による講演の一つとして、ご依頼いただく機会が多くなっています。

講座を受講した生徒からのアンケートでは、「生活設計やリスク



写真（上）：生活設計・生活保障に関する基礎知識を学ぶ機会を提供することを目的に、教員の協力を得て講義時間の一部を利用して、当センター職員が講師となり無料で講義を行っている。（下）：生命保険の役割とその仕組みをマンガでわかりやすく解説した中学生向け冊子「生命保険って何だろう？」（写真提供：生命保険文化センター〈2点とも〉）



に備えることの大切さについて学ぶことができ、自分の将来について考えるよい機会となった」必要な備えは人それぞれなので、生活設計をしっかりと考えることは大切だと思った」と、自分のこととして保険の大切さを理解している回答をいただいています。

▼学校教育用副教材の無償提供

当センターでは、各教科の先生方と懇談会を行い、学校教育用副教材も作成しています。冊子形式の副教材として、中学生向けにはマンガで生命保険について紹介した「生命保険って何だろう？」を発行し、20年度は約6万部を提供しました。また、高校生向けとしては、アクティブ・ラーニングの要素が入った、ワーク&データ集

「君とみらいとライフプラン」を提供しています。ワークにはライフプラン表が付いており、シールを貼って楽しみながら生活設計について考えることができる副教材です。20年度は、約12万部を提供しました。中・高とも新学習指導要領に対応した内容になっています。

その他、家庭科や社会科・公民科向けとして、編集可能な状態で当センターホームページよりダウンロードができるPowerPoint副教材を提供しています。先生方が普段利用している資料にスライドデータを自由に差し込んだり、一部引用できたりなど、自由度が高い教材であると使い勝手が良いという先生方からのご意見をもとに作成しました。少しでも空いた時間に「生命保険」について、気軽に授業で触れていただける機会をつくることが重要だと考えています。昨年度からは成年年齢引き下げをテーマとした教材も公開しています。なお、各種副教材には授業展開案などの教員用の手引も付属しています。また前述の実学講座の資料としても活用しています。

▼教員向け夏季セミナー

生活設計やリスク管理に対する

知識を深めていただくことを目的に、06年度より毎年、中学校・高校教員対象の夏季セミナーを開催しています。例年、東名阪を主とした会場のみでの開催でしたが、今年度は、初めて会場での参加とオンライン参加が可能なハイブリッド開催として実施しました。全国各地から参加可能となり、北は北海道、南は沖縄まで多くの先生方に参加いただきました。オンライン参加の先生方からは「オンラインだったので、参加しやすかった」「コロナ収束後もオンライン参加を可能として欲しい」などの声が寄せられました。

セミナーでは、大学教員による基調講演や家庭科・公民科教員による授業実践報告、先生方によるグループ別情報交換会を実施しています。今年度はZOOMのブレイクアウトルーム機能を使ってグループをつくり、会場参加者同士だけではなく、オンライン参加者同士による情報交換も実現しました。オンラインによる情報交換を実施した先生方からは、「全国の先生方の教材活用に関するノウハウを伺うことができ、参考になった」「授業への外部講師の活用や副教材の利用について、他県の

状況を知ることができて良かった」といった感想をいただきました。

▼SNSによる情報発信

昨今のSNSの普及を踏まえ、21年3月にYouTube公式チャンネルを開設し、6月にはTwitterを始めました。YouTubeでは、生命保険の見直しや保険金・給付金の受取時の注意点等、生命保険に関する相談事例をもとにした啓発動画を公開しています。また今年で第59回目を迎えた生命保険を題材とした「中学生作文コンクール」においては、作文の事前学習を目的とした、社会保険や生命保険が学べる動画を公開しました。今年度のコンクールは全国1000余校から、過去2番目に多い約3万5000編という多数のご応募をいただきました。

当センターでは、「ウィズコロナ」「新たな日常」といった環境変化を踏まえ、様々な取り組みを行っており、感染症の拡大や自然災害の発生等、リスク管理への関心が高まる中、当センターに期待される役割はますます重要であると認識しております。今後もさらに多くの方々へ情報提供ができるよう取り組んでいきたいと思えます。

異国日本の地に立つて

守屋留学生交流協会 奨学生の記

モンゴル人としての私



◆略歴◆

1993年 中国内モンゴル自治区シリント市生まれ
2012年 内モンゴル財経大学 財務管理専攻入学
2014年 アメリカ合衆国マサチューセッツ州・フロリダ州にて短期インターンシップで6か月間研修
2016年 内モンゴル財経大学 財務管理専攻学士課程修了
2017年 日本へ留学
2019年 帝京大学 経済学部経済学科 三年編入
2021年3月 帝京大学 卒業
2021年4月 拓殖大学 経済学研究科 国際経済専攻博士前期課程 入学
専門分野 国際政治

◆はじめに◆

私は、中国内モンゴル自治区の中心部にあるシリントという都市の出身です。私はチャハルという部族で、チャハル部族は近世以降のモンゴルの有力部族集団のひとつです。シリント市はシリント盟^{※1}の所在地であり、シリント盟の政治、経済、文化、教育と交通の中心地です。シリント盟には、元王朝の夏の都とされていた

公益財団法人 守屋留学生交流協会 第40回奨学生

シヨロン

上都遺跡があり、世界遺産にも登録されています。シリント市は、良質の天然牧草が豊富で、そこで育てられる羊は、内モンゴルの重要な畜産品のひとつです。一年当たり平均200万頭の羊を加工し、輸出しています。また鉱産資源も豊富で、石炭や原油のほか、特にレアメタルのひとつであるゲルマニウムは、世界の埋蔵量の38%を占めるといわれています。このように自然や資源にめぐまれ、地域の中心地としての役割をもつ地域で、大学卒業までを過ごしました。

内モンゴル自治区は国としては中国に属しますが、長い歴史をひもとくと、モンゴル国の一部であった時代は長く、ほかの内モンゴルに暮らす人々と同様に私自身は、モンゴル人としてのアイデンティティをもっています。

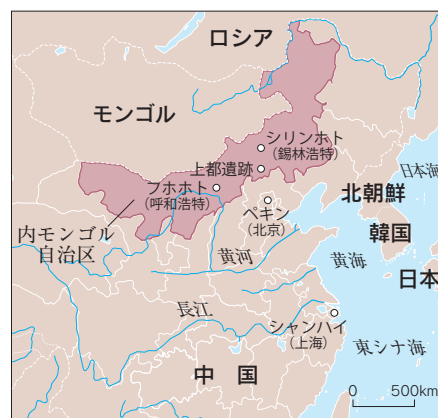
◆内モンゴルにおける教育事情◆

私は幼稚園から大学までモンゴル語による教育を受けてきました。幼稚園から大学に至るモンゴル語・モンゴル文字による教育体系があり、小学

校から高校まで、大部分のモンゴル人学校がモンゴル語を授業言語として使っています。小学校から高校まで使っていた教科書は、いずれの科目もモンゴル語で書かれていました。私のように都市で生まれた生徒は、モンゴルにおける遊牧民の生活などの伝統的な暮らしを知らずに育っており、モンゴル語（日本という国語）の授業において、語学学習で主体となる文法だけでなく、モンゴルの文化や歴史、ゲルの暮らしなど遊牧民の生活について教科書の題材をとおして学びました。

中国語は必修科目ですが、小学校の中学年（3年生）から勉強し始めます。中国語の比重は学年が上がるごとに高まりますが、大学レベルでもモンゴル語で授業を行う科目があります。私の場合は、大学入試もモンゴル語で受験しました。

学校によつては、モンゴル語と中国語による二言語教育を比較的用意がなされ、さらに外国語を含む三言語教育も普及させながら、大学レベルまでモンゴル語を中心とした教育をすることがあります。その一方で、2020年頃から、二言



※1 盟は、内モンゴル自治区にのみ見られる県よりも大きな単位の行政区画。

語教育における中国語の比重が徐々に高められています。モンゴル人学校の中には、母語（モンゴル語）と第二言語（中国語）の優先順位を逆転させ、授業言語を中国語に切り替えた学校も出てきているといえます。そのため、生徒がモンゴル語を学んだり、使ったりする機会が少しずつ減ってきています。また、以前はモンゴルの伝統的な生活について学ぶことができた、地域ごとに特色のみられた教科書も、いまは中国で統一したものとなっており、モンゴルの文化について学ぶ機会も同様に減っています。

◆留学を決意した経緯◆

私は内モンゴル财经大学在学中に、インターンシップで半年間アメリカに行きました。短い間でしたが、資本主義の魅力や民主主義の価値観に深い感銘を受け、その時から海外の大学で勉強した

いという思いが芽生えました。元々経済や政治に深い関心をもっており、専門的な知識を身につけるため、アジアで最も発達した民主国家と考えられる日本を進学先を選びました。

出身地の内モンゴルでは1930年代から日本による経済支援、農業支援などが行われており、モンゴルの文化を守る支援もあります。さらに、内モンゴルの多くの近代化の先駆者たちは日本に留学していました。また、これまでモンゴル国内では、上海協力機構（SCO）^{※2}に対する認識や意見が分かれ、多くの専門家は慎重な態度をもっていると考えられていますが、国としては上海協力機構への正式加入を検討する段階にきています。

このような大事な時期に、上海協力機構について学び、微力ながらモンゴル人としてどうすべきかを自分なりに突き詰めたいと考えています。

◆モンゴル国外交政策についての研究◆

大学では、モンゴル国の外交政策について研究しています。モンゴル国は、ロシアと中国にはさまれ、両国の影響を大きく受けています。従来はモンゴル国外交の研究では、民主化以前の時点では、ソ連という存在を重視し、ソ連への従属的な外交姿勢を指摘する研究者が多数でした。一方、民主化以後は、中国という存在を重視し、中国への従属的な外交姿勢を指摘する研究者も出てきています。また、ソ連の解体後にモンゴル国で勃発している民族主義運動におけるモンゴル国のナショナリズムを重視した研究も多くなっています。そのような状況の中で、内モンゴルでは政治面での制約があり資料収集の面などで限界があるた

め、上記のテーマの研究を中国で行うことには困難が伴います。そのため、東アジアに位置し歴史的にもモンゴル国と関係の深い日本で、モンゴル人というアイデンティティをもちつつ、先行研究を踏まえて客観的な資料に基づき、民主化後のモンゴル国の外交政策の変遷について実証的に研究を進めていきたいと考えています。

民主化後のモンゴル国の外交政策の変遷をみる際には、モンゴル国の隣国である中国とロシアや、日本やインドなどの「第三の隣国」との外交関係及びそれら諸国の間に存在する内在的な緊張関係を考慮に入れる必要があります。隣国との関係をみると、モンゴル国と中国との間には緊密な関係が構築されていますが、その一方でモンゴル国とロシアとの間にも密接な関係が構築されており、とりわけロシアとの関係は中国への過度の依存を回避するために重要な意味をもっています。対中国関係で自立性を維持しようとするモンゴル国は、アメリカとの協調、日本の経済援助なども不可欠であると考えています。このような条件の下で、どのような外交政策を選択すれば経済面で利益を最大化することができるのかという課題がモンゴル国には存在します。また、現在のモンゴル国には民主国家としてのアイデンティティが弱体化しつつあるという面があります。そのため、モンゴル国において民主主義国家との関係の強化を妨げている要因についても考察を進めていきたいと考えています。そして、資源が豊富で経済発展の可能性をもつモンゴル国の今後の成長に少しでも貢献できればと思います。

※2 中国、ロシア、インド、パキスタン、中央アジア4か国（ウズベキスタン、カザフスタン、キルギス、タジキスタン）が加盟する地域協力機構。



上都遺跡 中国内モンゴル自治区 2019年筆者撮影

子どもと、ともに



▲校長講義で触五山茶の歴史について学ぶ。
(写真はすべて今年度)。



▲生徒が製茶された茶葉を計量・袋詰めして密封すれば、触五山茶の完成。ラベル貼りも生徒の仕事だ。



▲茶摘みでは、地元協力者に機械刈りを行っていただく。



▲PTA有志がボランティアで袋詰めに協力してくださった。

茶園活動を通して自信と誇り・郷土愛を

岐阜県御高町立上之郷中学校

本校は、岐阜県中南部の木曽川南岸に位置する全校生徒46名の小規模校である。ここでは長年にわたり、生徒・教職員・地域住民の協働によって「触五山茶」というお茶を栽培・販売している。

●触五山茶の歴史

触五山茶の歴史は、66年前、昭和30年にさかのぼる。戦後の混乱期、大変物資が乏しい時代であったため、少しでも教育予算の助けに、また生産教育の発展にと、当時の校長の発案から地域全体の協力を得て、学校が茶園づくりを始めたのがきっかけである。学校沿革史によれば、三重県から仕入れた茶苗を挿木で増やし、一から開墾した現在の場所（約1.5ha）に定植させたという。以後、茶苗の植付、除草、施肥、灌水など、茶園の維持管理のために、生徒・教職員はもちろん、PTA、婦人会、青年団等を含め校下全世帯が奉仕した。こうした努力が実を結び、昭和34年頃から少しずつ収量が上がり、同36年に初めて製品として販売できるようになった。

茶園から船のへさきに似た5つの山が見えることから「触五山茶」と命名したとされる。以来数十年、「触五山茶園委員会」を中心に、歴代生徒・教職員、地域住民等の脈々たる営みによって、現在も「触五

山茶園活動」として続いている。近年では、生徒の発案からのペットボトル商品化や地元自治体からふるさと納税返礼品として選定される等、触五山茶は地元以外にも認知されるようになった。

●これからの触五山茶園活動

現在、学校では触五山茶の歴史と茶園活動の意義を次の世代に引き継ぐべく、茶園維持の活動にさらに積極的に関わることで、また総合的な学習の時間等を利用して、製茶されたお茶の袋詰めや販売促進のための工夫（ポップづくり等）を通して、さらに活動への自信と誇りを高めることを目指している。

生徒たちは「長く続く活動を受け継ぎ、これからも守っていききたい」「安全安心なお茶づくりのために除草活動もがんばる」と取り組んできた。コロナ禍で、例年全校で行う茶摘みは今年度は3年生のみの参加となったが、「なぜ触五山茶なのか」を理解する生徒らは、目を輝かせ丁寧に新茶葉を摘み採っていた。

私たちは、茶園活動発足当時の「我らの中学校のために」「地域と共に」という願いをもとに、この活動が今後も永く力強く続いていくよう、学校・地域が一体となり、今やれることを精一杯に取り組もうと決意を新たにしている。

階【きざし】

2021年12月15日発行 (No.46)

発行人：佐藤 清 発行所：株式会社 帝国書院

〒101-0051 東京都千代田区神田神保町3-29 電話03-3261-7748

©Teikoku-Shoin Co.,Ltd. 2021 <https://www.teikokushoin.co.jp/>

Twitter ID : @Teikokushoin